

生活背景を考え、腹膜透析を希望した患者の手技獲得に至るまでの看護介入

東邦大学医療センター大森病院 二号館四階東病棟

○野呂瀬有紗（ノロ アリサ） 宮村由希恵 畑なぎさ 福井葉香 細川さち子

【はじめに】

仕事継続目的の為、腹膜透析（以下 PD とする）を導入したが、手技獲得が困難だった患者への看護介入について振り返り、ここに報告する。

【対象】

A 氏 60 歳代男性、会社経営。難聴、視力低下がある。末期癌の妻と 2 人暮らし。

【看護の実際】

A 氏は仕事継続目的にて PD 導入したが、視野・聴覚障害がある為、手技獲得が困難であった。よって写真の拡大・コメントの追加をした独自のパンフレットを作成し介入した。A 氏の希望である APD へ移行し退院の目処が経った頃、大腿部頸部骨折を併発し安静を余儀なくされた。A 氏は早期社会復帰を希望しており、安静期間中も本人と相談し指導を進めた。しかし安静期間が長期化し、A 氏が苛立ち指導を拒む場面が多く見られるようになった。そこで医療者間でカンファレスを重ね、A 氏のストレス要因、指導方法の妥当性、導入後ではあるが再度 PD の適応について検討した。その結果、社会的立場や自尊心の高いことに配慮した指導方法を検討することで、手技獲得を支援していくことにした。これまでの手技が取得できていない部分に焦点を当てる指導的介入ではなく、患者自身が自発的に次の手順に気づき、行うことができる支援的介入に変更し実施した。その結果、手技獲得まで至った。

【考察】

手技獲得を妨げる要因を抱える患者であっても、多角的に患者をみて患者の思いを感じ取り、手技獲得できるよう関わることは重要である。また指導方法は様々であり患者に合わせた指導方法の検討が看護師に求められる。